

調査報告

福建語境界意識の連続体 —方言区画と方言イメージ—

井 上 史 雄

キーワード：福建語、閩南語、方言区画、方言イメージ、言語境界

要 旨

中国南部の方言の違いは、ヨーロッパの諸言語の違いに匹敵するとされる。本稿では方言差がことに激しいとされる福建省において、言語差意識の認知方言学的調査を行った。方言イメージと同じく、地図記入の手法をとった。「自分のことばと同じ」範囲と「自分のことばと似ている範囲」と「全く理解できない範囲」を分析した。福建省では「全く理解できない」ことばが並立するので、言語差意識においては、諸方言は独立した言語の地位を持つ。福建語と客家語は別言語ととらえられる。さらに福建語（閩語）は閩南語・閩東語・閩北語などのいくつかの下位方言に分かれる。離れた場所どうしてもでは相互理解が困難だが、隣接地域では相互理解の連続体・連鎖が成立する。また中国語の一部であるという意識がある。福州・アモイ（厦門）などの少数の都市は「正しい」というイメージに結びつく。ことばの標準・規範が存在するわけで、社会的に低く評価される方言が並列するのではない。独立の言語に近い位置を占める。

1. 言語と方言

1.1. 概説書の扱い

言語学概説書の言語と方言の論では、Bloomfield (1932) をはじめとして、中国南部の方言の違いを取り上げ、ポルトガル語・スペイン語・フランス語・イタリア語などの違いに匹敵すると記述する。しかし相互理解がどの程度か、実証的研究が紹介され、言及されることはなかった。一方Chambers & Trudgill (1980) は方言連続体 dialect continuum・連鎖という着想を具体化した。隣接集落ごとに相互理解度を調べて、つな

いで行けば、ポルトガル語・スペイン語・フランス語・イタリア語などのロマンス諸語は、国境を越えて連続すると論じる。ゲルマン語族でも同様に、スカンディナヴィア諸言語間では、それぞれの自国語を話しても相互に理解が可能とされるほど類似度が高く、「セミコミュニケーション」も可能なほどである (Gooskens & Heeringa 2012)。さらに現代は相互理解が可能な方言も独立な言語的地位を主張し、スペイン語に対するカタロニア語、フランス語に対するラングドクがロマンス諸語の言語連鎖に割って入ろうとしている。旧ユーゴスラヴィアのセルボ・クロアートは言語政策上は2言語または4言語に分裂している。言語間の相互理解度は、今新たな目で考察されるべきである。

日本列島にもこの発想の適用が考えられる (井上2001)。本州諸方言には相互理解の連続体・連鎖ができる。ただし沖縄語 (沖縄方言) の区画については、諸説がある (井上2016)。ユネスコの危機言語認定に使われたが、具体的な調査報告は未見である。

中国南部の諸言語に連続体・連鎖が成り立つかは、この観点から興味深い。中国語普通話の普及により、成人と学生に言語意識の違いがありうる。以下では福建省の言語状況に焦点を合わせる。

1.2. 中国語諸方言の相互理解度

中国語諸方言の相互理解度については、先行研究として Cheng (1988) などの計量的研究がある。Tang (2009) は、さらに進めて、中国語15方言の相互理解度の調査をし、信頼できる手法を用いて、納得できる結果を出した。Tangの研究は貴重で、実際の調査データで相互理解度を確認した。単語の近さの測定にはレーベンシュタイン距離を利用し、方言文の近さなどと同様に、多くの情報にクラスター分析を適用した。多様なアプローチの結果、言語差が連続的であることを示した。従来の中国語方言区分説と照合し、北方官話系と南方諸方言で大きな違いがあることを確認した。南方諸方言間の相互理解度については、低い、相互理解できる要素があると、結論付けている。しかし理解度または共通度の数値は10%とか30%とかの低さで、ヨーロッパの同系の諸言語相互の数値に近い。結論と逆に、言語学概説書の中国語南部の言語差の大きさが確認されたと言える。使われた単語の2～3割しか聞き取れないときには、話者は「まったく分からない」と表現するだろう。発話の情報が伝わらないときは、ますます理解不可能の反応が増える。

理解度については、「まったく分からない」の段階 (範囲) を適用できる言語は少ない。ヨーロッパの諸言語では、同一国内に「まったく分からない」と表現される方言が存在することは少ない。スイスドイツ語が例外的で、深い谷での自給自足に近い生活による

とされる。定住年代はゲルマン民族大移動のあとだから、千数百年間である。英語ははじめ有力言語では、国家を越えた分布があり、大航海時代以後、植民地支配を通じて拡大したので、世界地図レベルの調査になる。英語やスペイン語・ポルトガル語の相互理解の領域の広さは極端であり、現代はピジン・クレオール以外は世界中で理解可能と思われる。

中国南部の言語差の大きさは、意識面から検証の価値がある。以下ではまず中国語諸方言の先行研究の主要部分を紹介する。

Tang (2009), Tang & Heuven (2007, 2015) は、中国語15方言の相互理解度の調査を行った。第1図参照。福建省とその付近のことばとしては福州Fuzhou、厦門（アモイ）Xiamen、梅縣Meixianが調査対象になっている。

単語理解度のクラスター分析の結果によると、北方の普通話系統と南方の諸方言に2分される。第2図参照。北方普通話クラスターが分かれはじめる段階（図上端の目盛6のあたり）を南方方言にあてはめると、6個に分かれる。もう少し上のレベルでも4個に分かれる。南方諸方言をそれぞれ別の言語として扱ってもよさそうである。福建省の福州Fuzhou、厦門（アモイ）Xiamen、梅縣Meixianは中位のクラスターで分かれるので、かなりの違いである。相互理解度は14%から25%に過ぎず、北方普通話どうしの相互

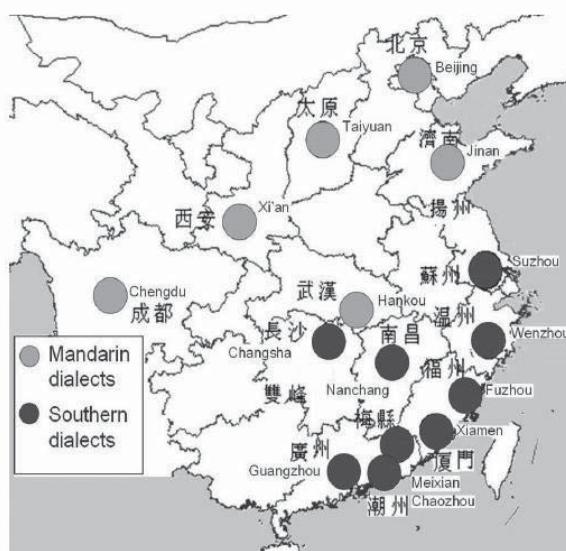


Figure 1. Approximate geographic locations of the 15 Chinese dialects targeted.

第1図 中国語諸方言の相互理解度調査地点 (Tang & Heuven 2015)

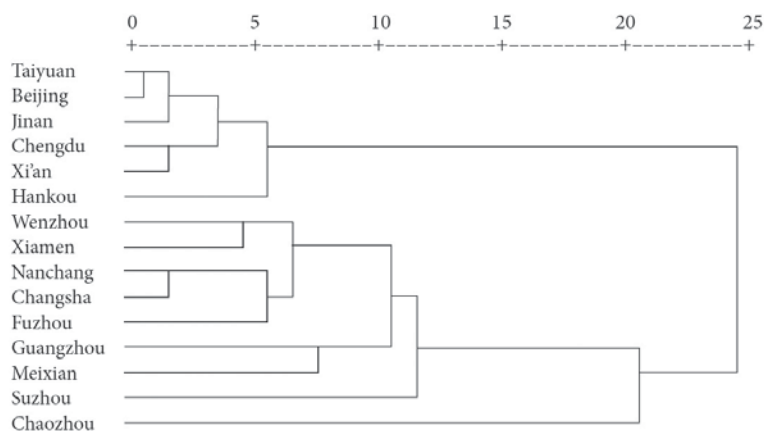


Figure 2. Dendrogram (using average linking between groups) based on word intelligibility scores obtained for all 225 combinations of 15 speaker and 15 listener dialects.

第2図 中国語諸方言の相互理解度クラスター分析（単語）

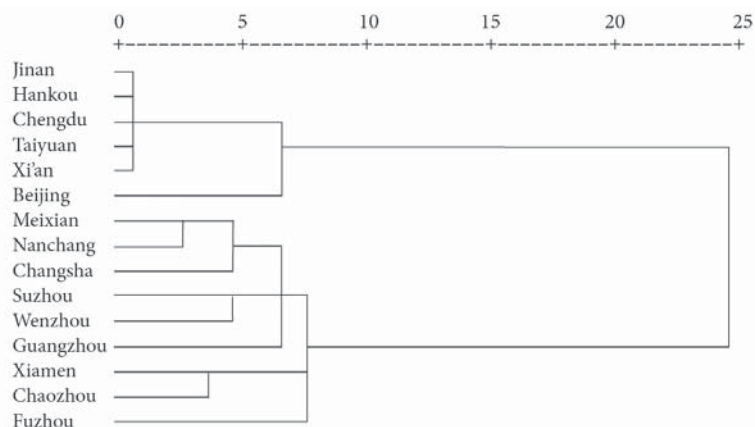


Figure 3. Dendrogram (using average linking between groups) based on sentence-level intelligibility scores (further see Figure 1).

第3図 中国語諸方言の相互理解度クラスター分析（文章）

理解度が50%以上であるのに比べると、福建省内の言語差は非常に大きいと言ってよい。

文章理解度のクラスター分析の結果でも、北方の普通話系統と南方の諸方言に2分される。第3図参照。以下は第2図と同様の説明になる。北方普通話クラスターが分かれはじめる段階（図上端の目盛6のあたり）を南方方言にあてはめると、4～5個に分か

れる。もう少し上のレベルでも3個に分かれる。南方方言を別の言語として扱ってもよい。福建省の福州Fuzhouと厦門（アモイ）Xiamenは上位クラスターで分かれ、梅縣Meixianは中位のクラスターで分かれる。相互理解度の数表によると3%から28%に過ぎず、北方普通話どうしの相互理解度がほぼ60%以上であるのに比べ、ヨーロッパの諸言語と比べると（Gooskens & Heeringa 2012）、別言語と言ってよい。

1.3. 中心と周辺

言語の定義は厄介である。国家語の場合は比喩的に、軍隊を持つ、国旗があるなどと言われ、標準語・文章語を持つ。名前があることも重要である。色名・星座と似て、単語には連続的な世界に網をかけて区切るという作用がある。単語によって分けけるのである。

非国家語の場合は、理解度が手がかりになるが、常に連続体をなし、境界は定めにくい。アフリカのある部族は近隣の言語を「1日のことば」「3日のことば」などと位置付けるそうである。その日数接すると理解できるようになるというスケールを持っている。

このような連続体を考えるときに役立つのが「プロトタイプ」（原型、典型、理想型）というとらえ方である。要するに中心と周辺のとらえ方で、連続体をなして周辺との境界が引きにくいときに有効である。言語と方言の連続的關係にも適用できる。一方周辺部と境界はあいまいなことが多いので、用心すべきである。

1.4. 認知方言学

言語と方言の連続的關係は、認知方言学 perceptual dialectology にも関わる。認知方言学は、話者の方言イメージ、メンタルマップなどを手がかりに研究する（Preston 1989, Inoue 1999）。Grootaersは戦時中に北京の近くで方言区画の試みを実施した（グロータース 1976, 1994）。日本に方言イメージ調査を紹介したが、中国語には適用できなかった（Inoue 2011）。中国南部の状況は、Preston (1989, 1999)、Preston & Long (2002) にも欠けている。認知方言学の手法を中国南部に適用する意義がある。

2. 福建省の言語状況と調査手法

2.1. 福建省の言語・方言分布図

第4図は、概略図である。調査票の記入用の地図はもっと細かく市町村名まで入ったものだったが（第6図参照）、本稿に収録すると読み取れなくなるので、ネットでダウ

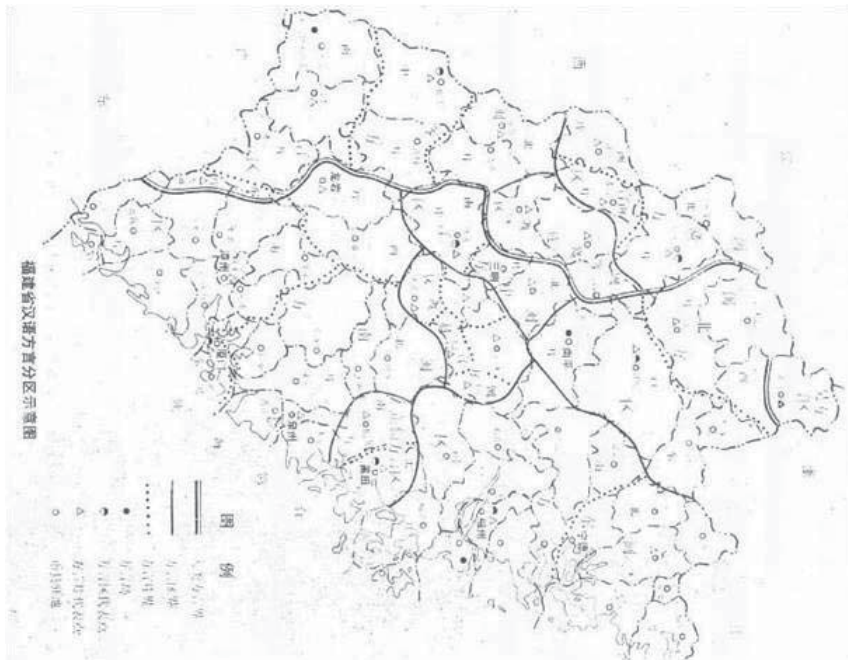


第4図 福建省地図 Map of Fujian Province

ンロードした地図を使う。福建省は中国大陸南東部に位置し、面積121,400km²、南北530キロ、東西480キロである。日本の関東地方と中部地方を合わせた大きさにあたる。人口は3,689万人（2010年）で、中部地方の1.5倍。中国北半の大平原と違って、険しい山が多い点でも、中部地方を拡大した感じである。

中国南部の方言の違いは有名だが、福建省も言語差・方言差が大きい。福建語のマスメディアもある（小田2015）。記述研究は進んでいるが（秋谷2008、秋谷他2012など）、福建省内部の方言意識について、詳しく調査する価値（余地）がある。

方言区画(図)の代表として第5図を掲げる(福建省2006)。境界線が定めにくいようで、他にもいくつかの区画案がある。アシャー他(2000)の地図は、他の図の区画と一致しない。北の呉語、西の客家語との境さえ食い違いがある。インターネットで画像検索した結果でも多様な地図が出て、客家語と閩(びん)語(福建語)の境界線さえも一致が見られない。方言調査密度が不十分なせいもある。方言の地理的連続性のために線を引きにくいこともあるだろう。区画の背景にある相互理解の程度については、言及がない。



第5図 福建省漢語方言区画図 Map of dialect division of Fujian Province

2.2. 調査の手法

本稿の手法は、Tang(2009)と違って、実際に録音を聞かせるものではない。方言イメージの地図記入と同じ手法をとった。話者の判断、ステレオタイプに基づくもので、言語の実態を踏まえていない。それぞれの話者の過去の経験に頼り、具体化して地図に記入してもらった。話者はふつう地理、地図を意識しないので、無理に記入させた恐れがある。プロトタイプの内容は意識しても、境界はあいまいなので、用心すべきである。実際には後掲の図で分かるように、学生の大部分は大まかな円形で記入しており、中心は分かるが周辺の境界が不明であることを示している。(かつての)行政区画などに影響されている可能性がある。言語そのものを知らなくても、学者でなくとも調査できるという利点がある。東京人に関西弁が違うという意識があっても境界は知らないことが多い。東条操の方言区画の変遷が示唆的である。

事前の学生とのグループインタビューによると、学生はふだん普通話（北京語、官話、標準語）を使う同郷の学生どうしだと方言を使う。古田、莆田、アモイ、長汀出身の4人の学生の方言発話は、相互に理解不可能だった。ただ東部の古田と莆田の学生は「少

し分かる」という反応だった。つまり福建省の学生はそれぞれが自己の方言を使うセミコミュニケーションを行わない。セミコミュニケーションが不可能なほど、言語差が大きい。この点で、台湾の閩南語で、過去にどのような相互同化があったか、興味深い（李仲民2014）。

他方で都市部では急速に普通話が普及し、例えばアモイ市では逆に小学生に方言教育を行う段階になっている。中国語学者秋谷裕幸氏（私信）によれば、以下のような状況である。「大学生ですと18～22歳くらいですから、出身地にもよりますが、方言よりも主として標準語で育っている場合も多いと思います。とりわけ「城関」出身者には注意が必要と感じられました。例えば福州中心部在住の私の友人の娘さんはこのような質問にはまったく対応できないと思います。」

このため、調査票（付録に掲げる）では「普通話しか話さない人は、自分の父親のつもりで書いてください」と指示した。

調査票は3回の調査で同じである。学生に集合アンケート調査を行ったが、成人には面接した。第1次調査の相手は、福建師範大学福清分校日本語学科3年生で、筆者の講演のあと、教室で筆者の日本語による説明で実施した。日本語教師の中国語による補充説明があった。第2次調査は東部の閩東方言、西部の客家語について、現地調査を行った。筆者が日本語で説明し、同行の日本語教員が中国語で説明して記入の補助をした。話者のうち3人は客家語の研究者（大学所属）である。第3次調査の相手は福建師範大学福清分校日本語学科4年生で、日本語教員に依頼した。筆者は同席せず、調査票の郵送を依頼した。

第1表に調査対象の集計を掲げる。学生の大部分は福建省の海岸沿い中央部の出身である。女性が圧倒的で、男性は数人にすぎない。

第1表 調査対象者の地域と世代 Subjects by area and generation

成人		学生			
第2次調査			第1次調査	第3次調査	計
閩客方言（永定縣）	3	西部客家語	5	3	8
閩客方言（龍岩市）	4				39
		西部福建語	20	19	18
閩東方言古田縣	2	東部福建語	12	6	
福清	1				
		他省出身学生	12	0	12
計	10		49	28	77

3. 調査結果1：福建省成人の言語異同意識

3.1. 結果の概要

調査票では、地図に3種の線を引いて4領域に分けることを依頼した。4段階で記入するのだが、中間段階と理解不能の段階が難しかったかと思われ、一方の記入の欠ける地図もあった。

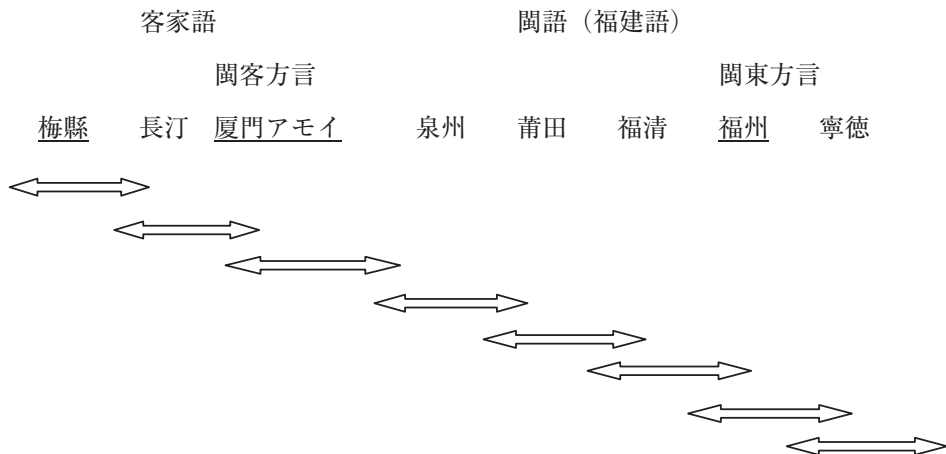
- | | | |
|---------|---------------|---------|
| a. 同一 | 自分のことばと同じ範囲 | 太線の内側 |
| b. 類似 | 自分のことばと似ている範囲 | 普通の線の内側 |
| c. 相異 | 自分のことばと違う範囲 | 点線の内側 |
| d. 理解不能 | 全く理解できない範囲 | 点線の外 |

他省出身学生は全員福建語は「理解不能」との記入だった。福建省内出身学生にも無記入があった。後述の「正しい」「快い」についても無記入があった。

本稿では、a.同一領域とb.類似とc=d.理解不能の3種の境界線を透明シートに転記した。

以下の分析結果を先取りして模式図で示すと、第2表のようなになる。下線の梅縣・廈門アモイ・福州が前述Tang (2009) の調査地である。なお第5図に対応する表によれば、福建省南部の方言は、以下のように区分される（福建省2006）。闽东方言（福州）、莆仙方言（莆田）¹⁾、闽南方言（厦门）、闽中方言（永安）、闽北方言（建瓯）、闽客方言（长汀）。

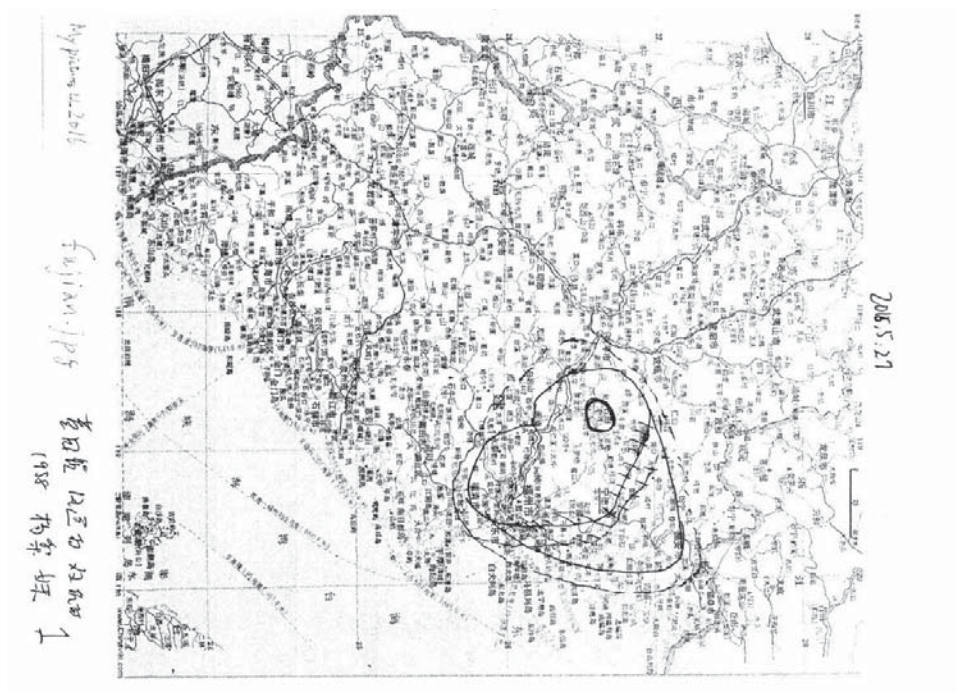
第2表 福建省の言語相互理解度の連続体 Fujian dialect continuum



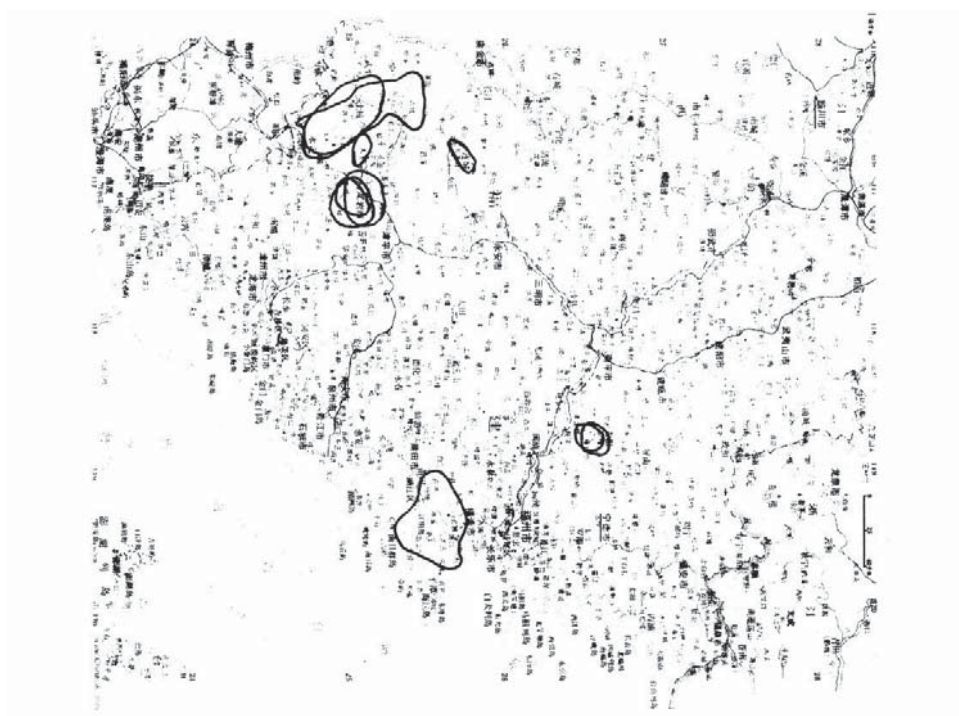
3.2. 成人の記入例

第6図に閩東方言古田の成人の記入例を掲げる。山村の街道沿い（古田縣黄田鎮風亭村双抗村）で面接した女性の例である。地元で生育したごく普通の人で、成人後党や村の仕事でよその人と話す機会ができたとのこと。東は寧徳市、南は福清市までを理解可能の範囲に入れていたが、本人が線を訂正した。福安市の人と会ったところ、最初はことばが分からなかったが、長期にわたって話をしたので、分かるようになったとのことだった。方言理解度の程度を具体的に示すエピソードである。以下の秋谷裕幸氏（私信）とほぼ一致する。

「古田は東側が福州方言に近い侯官方言群、西側がいわゆる福寧方言群に属します。福州の人は羅源までは聞き取ることが可能だが寧徳に入ると突然聞き取れなくなるとよく聞きます。古田は寧徳市に所属しており、かつ県内に福寧方言群が分布しているので寧徳方言的な方言にも対処できるのでは、と頭の中で考えましたが、やはり先生が実施されているような実証的な研究を行う必要があると思います。」



第6図 記入例 成人の同異意識 Example of consciousness of an adult



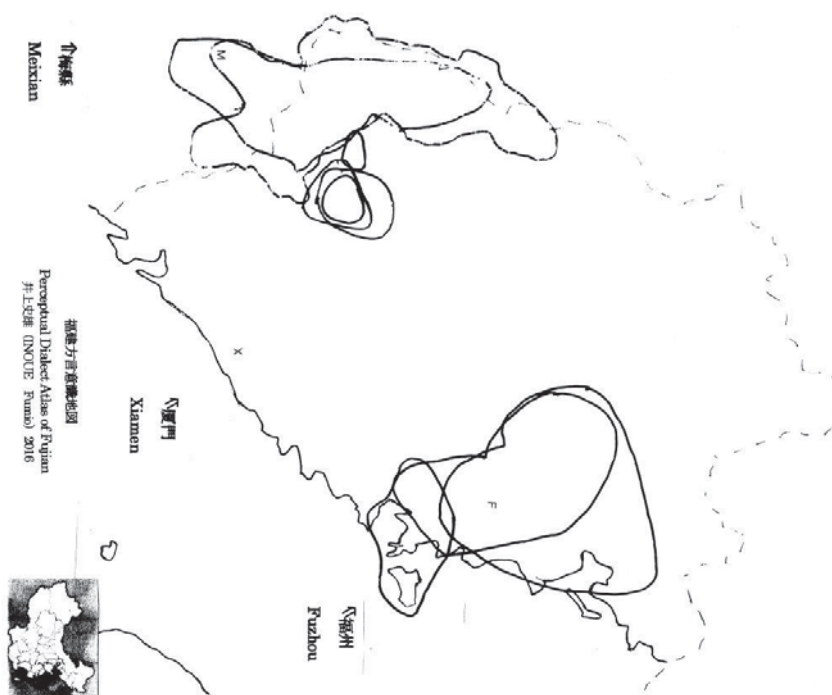
第7図 成人の同一方言意識 Consciousness of the same language by adults

3.3. 成人の同一方言意識

第7図に成人の話者全員の「同一意識」、自分のことばと同じ範囲を示す。現地調査は閩東方言古田縣と客家語の閩客方言（永定縣、龍岩市）の2地域3地点で行った。また福清市在住者一人のデータも入れた。線を転記し、基礎地図も示す（意識の線を目立たせるために、基礎地図を不鮮明にした）。山間部では同一意識の範囲が狭く、自分の村の近くだけで、隣の村と違うという意識があるが、都市部だとやや広い範囲を同一とする意識がある。

3.4. 成人の類似方言意識

第8図に成人の話者全員の「類似意識」、自分のことばと似たことばの範囲を示す。転記した線を目立たせるために、以下の図の大部分では簡略基礎地図を用いた。海岸線、省境界と（海の中に矢印を付けて）3都市名を示す（F福州Fuzhou、X廈門（アモイ）Xiamen、M梅縣Meixian）。右下に中国全体の地図を縮小して入れた。



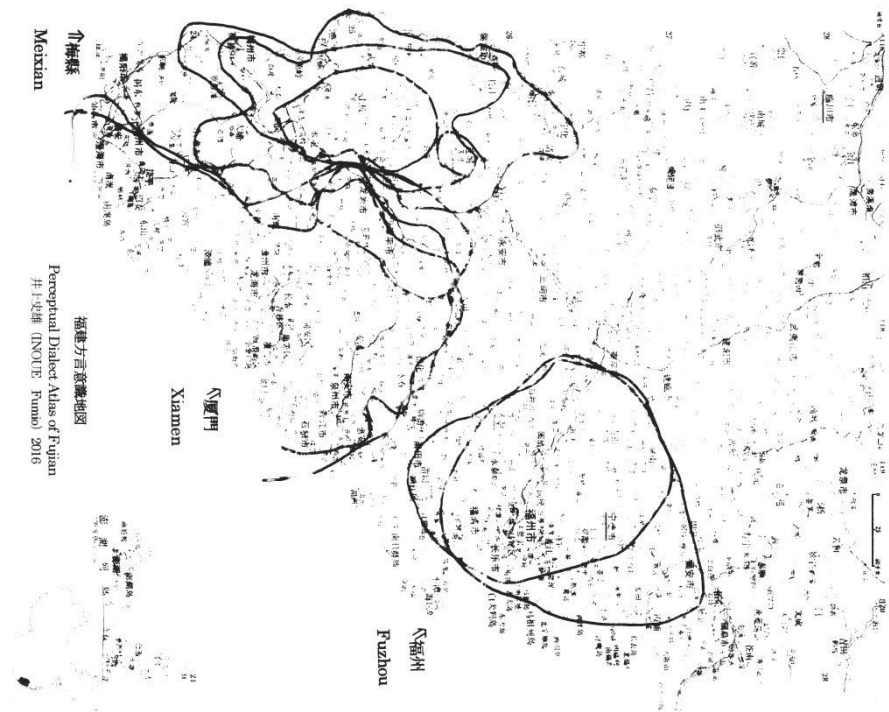
第8図 成人の類似方言意識 Consciousness of similar language by adults

山間部でも類似意識の範囲が広く、自分の村の近くだけでなく、やや広い範囲を類似と認める傾向がある。西の客家はさらに西の広東省梅縣との類似を認める。東の古田でも福州と類似するという。大都市との類似を一方向的に認めるという一般傾向に合致する。

3.5. 成人の理解不能意識

調査票では、「理解不能」全く理解できない範囲を、点線の外にする形で記入してもらった。点線の内側は何とか理解できることばである。第9図では転記した線を目立たせるために基礎地図の地名を薄く不鮮明にした。

第8図より領域が広い。現地調査が東部と西部なので、二つに分かれ、重ならない。西端の客家語の話者は福建省内の客家語領域のかなりが分かれると答えるが、ひっくり返すと福建省内の客家語もその西に延びる客家語も理解不能である。半径100キロくらい先が理解不可能になる。



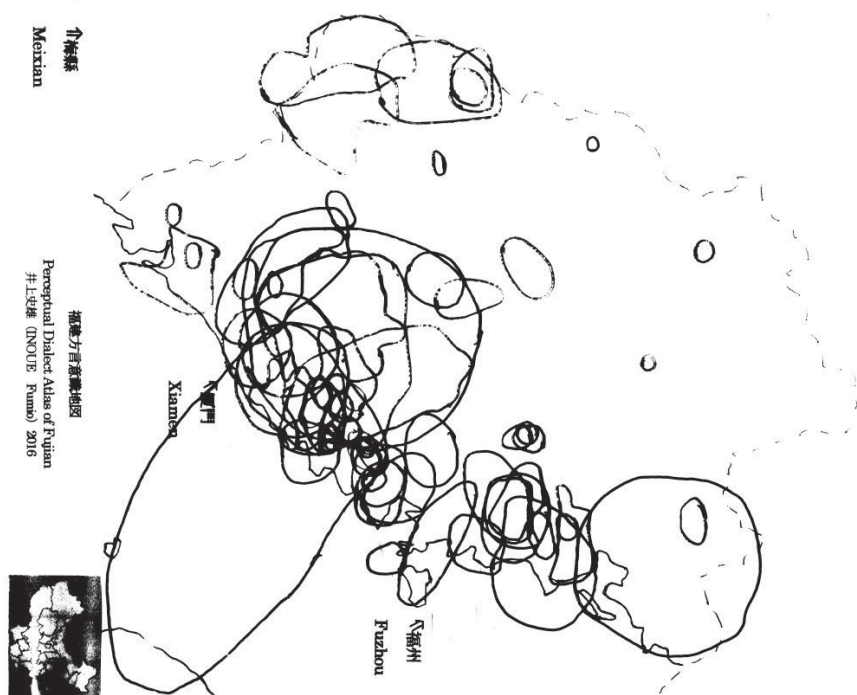
第9図 成人の理解不能意識 Consciousness of unintelligible by adults

客家語と福建語の違いは意識されていて、両方をカバーする広い領域の答えは少ない。西部客家語と中部福建語の境界線が集中するが、一部重なるのは、地図の記入が正確でないため、または話者の境界線意識がはっきりしないためであろう。

4. 調査結果2：福建省学生の言語異同意識

4.1. 学生の同一方言意識

第4節では福清の大学生について述べる。まず同一方言意識の結果を第10図に示す。出身学生の多い海岸沿いの都市部、特に廈門（アモイ）付近では、同一方言意識の線が重なる。しかし西部客家語と中部福建語の境界線は意識されていて、空白の地域がある。東の福州・福清と莆田（ほでん）の間は重ならない。また莆田とその西の泉州市とは、重なりが少ない。泉州市から石獅市などを経てアモイまでは重なりが多い。意識としては連続的なのだろう。成人に比べると領域が大きい。直径20キロから100キロほどが多



第10図 学生の同一方言意識 Consciousness of the same language by students

い。なお台湾の閩南語に注意を払った学生もいる。「同一」のとらえ方に成人とは違いがある。

4.2. 学生の類似方言意識

学生の類似意識の範囲を第11図に示す。東部出身（閩東方言）話者の線を見ると、大部分の学生の範囲がほぼ一致し、福州・福清と莆田が入る。直径は100キロ程度が多い。

西部（閩南方言）・北部（閩北方言）および閩客（福建省の客家）方言の話者の線を見よう。西端客家語の類似意識範囲はよく一致している。西南端の客家語の話者一人は省の境界を越えて広東省との類似を認める。中央部閩南語の閩南方言はアモイ付近に中核があり、西のはずれはアモイの西から福建省の西端まで、線の位置が散らばる。東のはずれは莆田の西に線が重なる。海岸沿いでは、莆田の西に意識の境界線がありそうである。



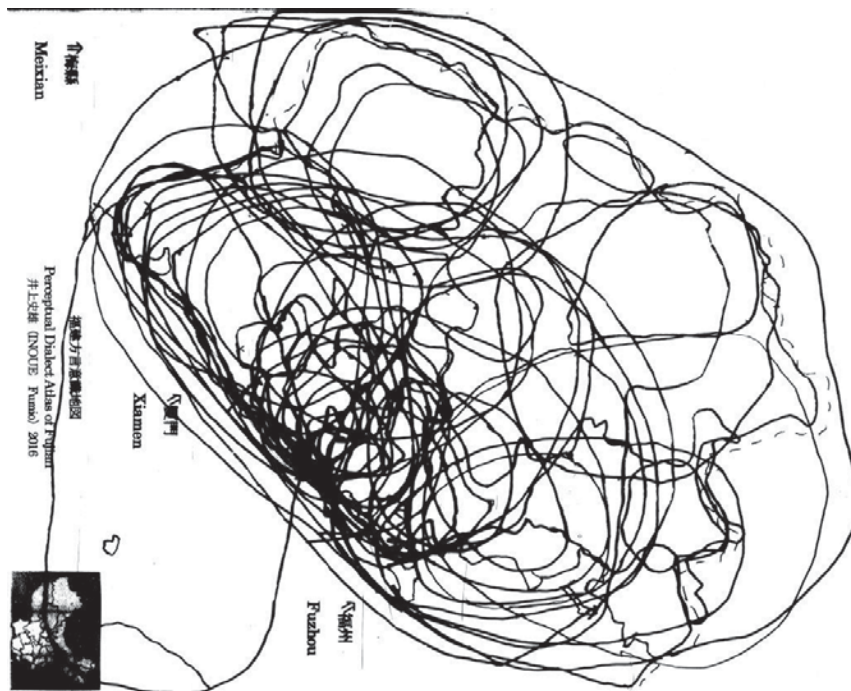
第11図 学生の類似方言意識 Consciousness of similar language by students

4.3. 学生の理解不能意識

第12図には学生の「理解不能」、全く理解できない範囲を示す。東部出身（閩東方言）学生の一人は福建省全部のことばを理解可能とした。西部の客家語の存在を無視（または忘却）しているのだろう。しかし大部分の学生の範囲は狭く、福州・福清と莆田が入る程度である。直径は200キロから300キロが多い。第11図の「類似」と比べると、範囲がかなり広がっている。

西部出身（閩南方言）・北部（閩北方言）および閩客（福建省の客家）方言の話者の線を見る。閩南語の閩南方言と客家語の閩客方言の二つの中心がある。第11図の「類似」と比べると、範囲が大幅に広がっている。しかし基本的なパターンは同様である。

西端の閩客方言（福建省の客家語）と中央部の閩南方言との境が重なるのは、境界線の正確な位置について、学生の知識が十分でないためだろう。客家の多い龍岩市の境界と一致しないせいもある。泉州市から石獅市などを経てアモイまでは重なりが多い。沿海の都市部では、理解できる範囲が広い。しかし直径は200キロから300キロほどが多い。



第12図 学生の理解不能意識 Consciousness of unintelligible by students

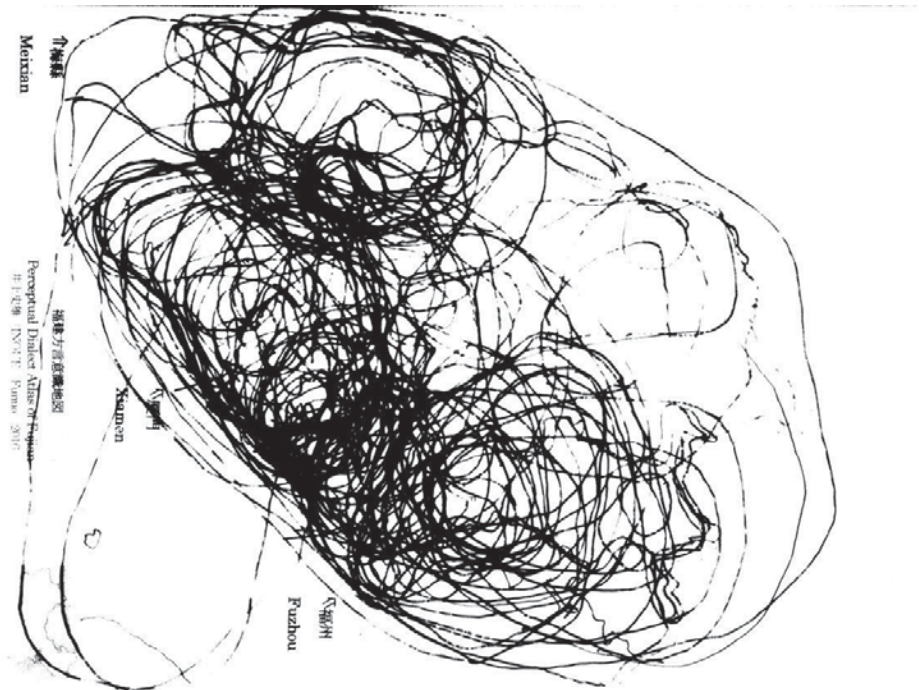
福建省の内部で、これだけの理解不能意識があることは、注目に値する。日本やヨーロッパでは考えられないし、中国北部でも、ありえない。

相互理解度は非対照的で、社会的に劣位にある体系の持ち主は優位の体系を理解する（と主張する）が、逆は成り立たない。また言語的には単純化を起こした体系の持ち主は複雑な体系を理解するが、逆は困難である。福建省の東部と西部を比べると、西部の学生の多くは福州のことを理解不能とする。それに対して福州を含む東部の学生の一部はアモイの近くまでを理解可能範囲に入れる。ただし福州市の西の莆田が中間の小規模な緩衝地帯を形成し、アモイも福州も理解不能の範囲にする。相互理解の連続体・連鎖がありうることを語る。

5. 調査結果3：福建省成人・学生の言語異同意識総合

5.1. 成人・学生の方言差意識総合

第13図には成人と学生の類似意識と理解不能意識を全域で重ねた地図（第1次～第3次調査）を示す。同一意識の地図を除いて、第8～9図、第11～12図を重ねたものにあたる。線の位置は様々に見えたが、重なる場所がある。類似意識と理解不能意識の地図を比べたときに領域の大きさの違いがあったが、全部を重ねてみると、境界線の位置は似ている。西から見ると、龍岩市の客家語地域、アモイ市とその隣接の市、福州市の三つの圏が目立つ。福州市の西の莆田が緩衝地帯として独立または両属の地位を示す。北部は記入した人数が少ないが、いくつかの意識の方言区画を形成しそうである。全体として見ると、第5図の方言区画図と類似が見られる。民衆の方言把握は、大まかに見ると学者の言語学的な分析と共通点がある。現在福建省には1副省級市（アモイ）と8地級市が設置されているが、その境界線と第13図の線は一致しない。調査票の地図に



第13図 成人・学生の類似+理解不能意識
Consciousness of similar & unintelligible by adults & students

都市の境界線が書いてなかったことも影響したのかも知れない。なお都市・町村名、河川、山、道路、鉄道などは記入してあった。

以上成人と学生の方言異同意識を分析した。同一と考える領域は狭い。また理解が可能な領域もそう大きくない。福建省内がいくつかの相互理解不可能な地域に分かれる。

Tang (2009) の調査した福州とアモイは、相互理解度が1割か2割程度だったので、別言語扱いでよい。中間の莆田が独立の地位を持つか、問題である。東部の話者の一部も、西部の話者の一部も理解可能な領域に入れることがある。いずれにしる方言研究者が認める福建語の7個の「方言」は(第5図)、話者の意識では理解不可能だから、相互理解度による言語学の常識では別言語扱いしてよい。

一方で、第13図で分かるように、理解可能な範囲は相互に重なって、海岸沿いだと連鎖、連続体をなすと見られる。ことに西の方で客家語と閩南語の境界線が重なる点にも注意すべきである。二方言の接触する都市などには2言語話者 bilingual が居て、別の意味の連続体を形成するのである。

以上、Chambers & Trudgill (1980) の唱えた相互理解の連続体・連鎖が、大勢の調査結果を重ねることによって、実証されたことになる。つまり数百キロ先には「まったく分からない」ことばがあるが、その中間地点まで行くと、そこのことばを理解する人がいる。隣接集落のことばを順にたどって、理解できるかどうかを聞くと、どこにも「まったく分からない」ような境界線はない。方言の連鎖、連続体が福建省には存在する。

6. 調査結果4：福建省の方言イメージ

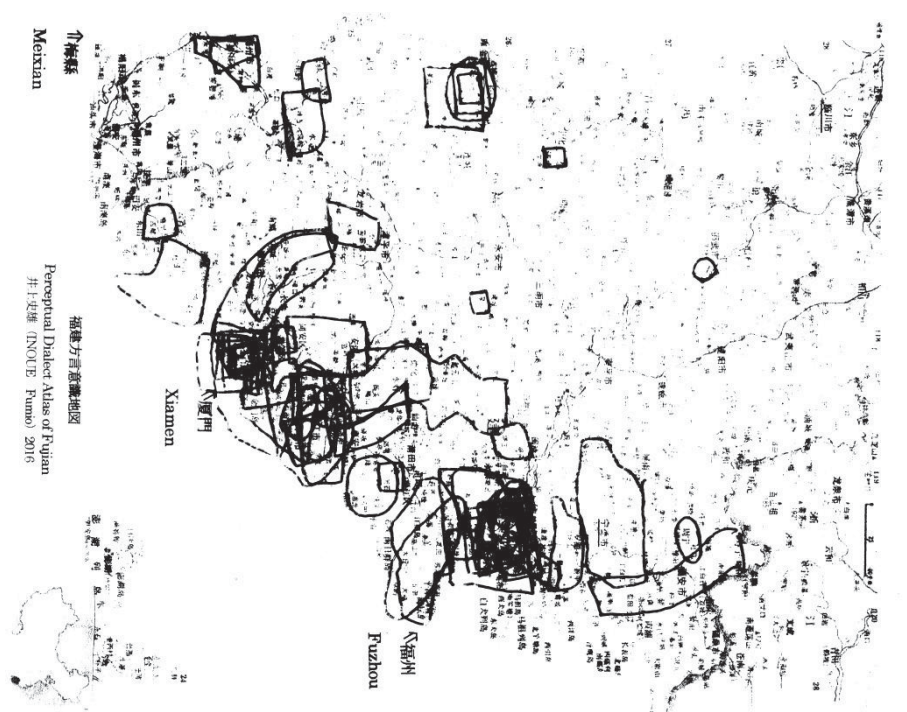
6.1. 「正しい」イメージのことば

以上の方言区画意識に加えて、方言イメージも調査した。調査票では以下の記入を依頼した。

- a. 正しい correct ことばを使う範囲 横線
- b. 快い comfortable ことばを使う範囲 縦線

「正しい」は知的イメージの代表語として選んだ。第14図に示すに際し、転記した線を目立たせるために地図の地名は薄く不鮮明にした。記入者が少ないのは、あまり考えたことがないからだろう。現地調査の成人の4人も同一地図にする。領域が重ならず、山間部は囲まれない。第10図によると、出身者が少ないためもある。

東から福州市・泉州市(潮州)・厦門アモイ市・長汀市(客家)の四つにきれいに集中する。第13図で境界線が重ならない場所でもある。西の長汀市は閩客方言(客家方言)



第14図 「正しい」イメージの方言 Dialects of “correct” image

の代表だろう。東の福州市は閩東方言の代表だろう。中間の泉州市と廈門市は閩南語閩南方言に二つの中心があることを示す。第13図でこの2都市の間に境界線は少ない。

前節までで方言領域の外周について記入を求めた。この節では方言領域の中心または手本の記入を求めたことになる。

学者の方言区画（第5図）と中心は一致する。境界線はほぼ一致するが、素人だからずれることもある。中心がはっきりしても、周辺部が漠然としているためである。泉州市と廈門市の重なりは線の引き方が不正確なため、または双方を含めた回答のためである。なお、離れた場所2か所を「正しい」とした人もいる。

「正しい」の記入者総数は、第1次49名中36名、第3次28名中13名、第2次（成人）10名中2名、計77名中51名で、無記入も多い。「正しいことば」について、考えたこともない人もいるのだろう。

一般に方言と「正しい」のイメージは結びつきにくい、言語には結びつきうる。ヨーロッパの言語では、標準語は都会のことば（またはイタリア語のように古くからの書き

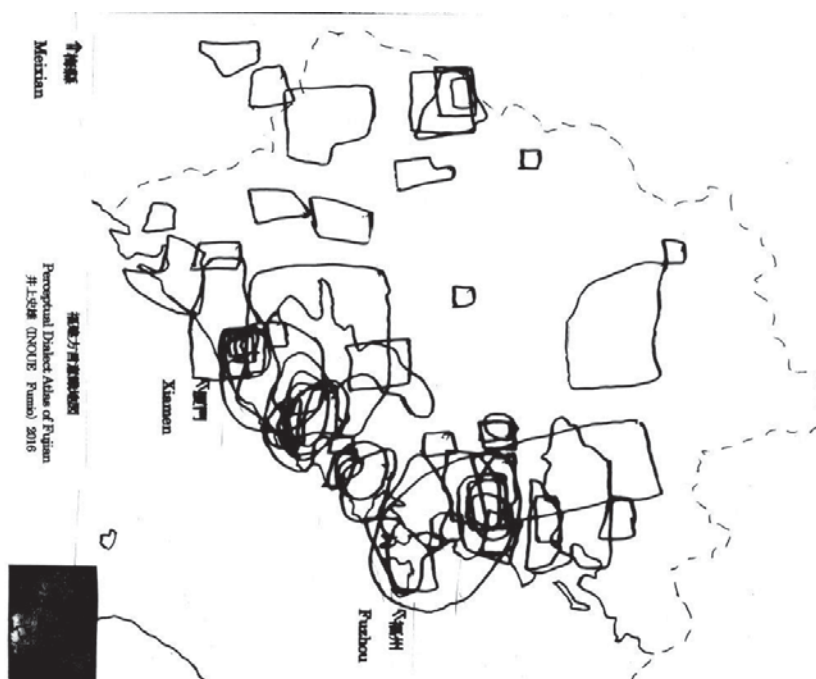
ことば)に基づく。日本語ではマスコミのアナウンサー基準が多い (Smakman 2006)。中国語では普通話 (北京語発音) は、北京官話の子孫・後裔である。中国南部の「方言」に、それらと異なる正しいことばの規準の地があることは、注目すべきである (宮本2009)。

6.2. 「快い」イメージのことば

情的イメージの代表としては、「快い」を選んだ。Pleasant (Preston 1989) と同じである。教師が「快」の意味を口頭で説明し、中国語と違って「早い」の意味ではないと伝えた。

第15図に示す。これも記入者が少ないので全員を1図にした。全体の記入傾向としては、第15図の「正しい」と似る。福州・潮州・アモイ・客家の四つ以外に莆田や福清などの都市のことばが登場する。「正しい」ほどには集中しない。学者の方言区画 (第5図) と矛盾しない。

第10図の本人の生育地と同一領域に線を引くことが多い。北部の山間部に領域が点



第15図 「快い」イメージの方言 Dialects of “pleasant” image

在するのは、そのためである。英語でも同様で、自己中心的なイメージで、自分の母方言には快さが結び付く（Preston 1989）。一般に自分の方言への愛着と誇りがあり、方言と「快い」のイメージは結びつくが、日本語の東北方言のイメージは別である（井上 1989）。

7. 結論

中国南部の諸方言は、理解度についてのステレオタイプのとらえ方によれば、独立した言語の地位を持つ。しかも福建語（閩語）がさらに分かれて、閩南語・閩東語・閩北語などの下位方言も別言語に近い地位にある。Tang(2009)は、実際に録音を聞かせたり、同一文の方言訳や単語リストを分析したりして、共通部分があることを根拠に、中国語の下位方言と扱ったが、相互理解度が低く、共通度も低い。ヨーロッパ諸言語で相互理解度が高いにも関わらず、国家語であり、別の標準語があるために独立言語になっていることを考えると、福建省には相互理解の困難な多くの言語が分布することになる。スカンディナビア諸言語でセミコミュニケーションが報告されているが、福建省の言語相互間での報告は未見である。つまりセミコミュニケーションが成り立たないほど言語差が大きいと思われる。台湾ではどんな言語同化があったのだろうか（李仲民2014）。

もしも相互理解度が急に悪くなるような地域があるとしたら、言語地図（方言分布図）自体において、多くの等語線が重なる形で観察されるはずである。実際には中国語でも等語線の束が観察されるだけなので（岩田2008、日高2013）、相互理解度が段階的であることと辻褄が合う。福建省内の語彙の分布図を検討しても分かる。岩田（2009）で等語線を見ても一致がまれで、客家語と閩語（福建語）の境界線とも重ならない。相互理解領域の重なり合い、相互理解の連続体・連鎖があることは、語彙の分布図からも納得できる。

言語差意識のうち、「まったく分からない」ことばの地理的範囲の調査は、欧米では方言差がそれほど大きくないので不要（または困難・不可能）である。しかし他の言語では試す価値がある。日本では以前は不可能に近かった。マスコミを通じても全国の方言を耳にすることは多くなかったからである（Inoue 2015）。1960年代の試行で、八丈方言と本土方言を扱ったが、相互理解度は連続体をなすと分かった。しかし若い世代に共通語が普及したので、今からでは適用が遅い。当時の調査では各地の雑多な録音データを数か所で聞かせた。現在は「桃太郎」のような同一内容の各地の録音がある。（抜粋を）大勢に聞かせる方法で、（相互）理解度を数値化できるだろう。琉球方言はもち

ろん、鹿児島県や青森県の録音について「まったく分からない」という反応が出る可能性がある。

中国南部では「まったく分からない」ことばの調査が有効である。福建語はいくつかの福建方言に分かれる。先取りして第2表に示したように、離れた場所どうしでは相互理解が困難だが、相互理解の連続体・連鎖が成立する。泉州語も連続体の一部をなす。客家語は別になる²⁾。

中国の若者、学生には普通話が普及したが、大学入学後に他地域の出身者の方言に接して、相互理解度を確認できる。「素人の方言意識を聞いても、知らないだろう、あてにならないだろう」という考えもあるが、実行したところ、大まかには信頼できると確認できた。地理的範囲も大勢の線を重ねると、そうばらばらにならず、いくつかの圏域を形成する。またイメージを調査して、それぞれの圏域に正しさの中心地が存在することが分かった。

Tang (2009) によれば、福州とアモイでは別言語を使っていると処理していい。その中間の莆田・泉州などを入れたらどうなるかを知りたい。ただし本研究によると、福州とアモイの間に同じ地位に立つ別言語が話者の意識の上で存在しないようである。緩衝地帯としての位置づけは可能で、莆田などを入れることにより、相互理解の連続体・連鎖が成り立ちうる。Chambers & Trudgill (1980) が唱えるように、実際に集落ごとに（または鉄道駅ごとに）隣接集落（隣接駅）のことばの理解度を聞く（または実際に録音して試す）という手法をとれば、隣接地のことばが「まったく分からない」という答えは出ないだろう。

Tang (2009) の15地点は現今の調査技法を使えばもっと増やせる。そうでなくとも、このためには中国南部の諸言語・諸方言に限って同一技法による詳しい研究が望まれる。もっと多くの地点の録音を1か所で聞かせる技法も可能である。北方官話系統のサンプルは少数でいい。一方でベトナム語・チワン語（壮語）などをダミーとして入れて、相互理解度がどうなるかを見れば、中国南部の諸言語・諸方言との対比（相互の違いの大きさの確認）が可能になる。

中国南部、ことに福建省は、言語と方言の理論的考察を行うには最適のフィールドである。実地調査を踏まえて、(欧米の) 言語学の概説書の記述は改められるべきである。

注

- 1) 次の記述によれば、福州・莆田・泉州の間には相互理解が成立しない。ただ、境界線をはさむ隣接集落の住民が他方の集落の住民のことばを理解できないかは、不明

である。「私にとってショックだったのは、莆田のことばが、福州とも泉州とも異なることだった。私は泉州のことばができるが、莆田のことばはまったくわからない。訛といった、なまやさしいことではないのだ。福州の人も莆田のことばは理解できない。車で二時間の三つの土地に、三つの言語がおこなわれている。しかも、福州や泉州のことばは、それを用いる人口がかなり多いのに、莆田のことばは使用人口がきわめてすくない。莆田の人は、いったん郷関を出たなら、よそのことばをおぼえることからはじめなければならないわけだ」(陳舜臣1989「林則徐と語学」『雲外の峰』二玄社p.100)。

- 2) 秋谷裕幸氏から以下のコメントがあった。「莆田、仙遊の方言は、故Nicholas Bodman教授のいうように、系統的にはびん南語に近いと思います。それがびん東語の影響を強く受け、独自の方言群に変化したのだと思います。どのように扱うかは、研究の目的によって変わってくると思います。もしも私がびん南語の祖語を再構するとしたら、莆田方言のデータも含めるか、もしくは参考にしたいと思います。相互理解度のような問題を扱うのであればびん南語とは別ものということになるように思います。」

文献（日本語中国語五十音順、英語 Alphabetical）

- 秋谷裕幸（2008）『閩北区三縣市方言研究』台北：中央研究院語言學研究所
 秋谷裕幸・陳澤平（2012）『閩東区古田方言研究』福建人民出版社
 アシャー他（2000）『世界民族言語地図』東洋書林
 井上史雄（1989）『言葉づかい新風景（敬語・方言）』秋山書店
 井上史雄（2001）『計量的方言区画』明治書院
 井上史雄（2016）「方言研究の難問—琉球語と方言区画の変動—」『日本語学』34-5: 52-65 明治書院
 岩田礼（2008）「中国語の言語地理学：歴史、現状及び理論的課題」金沢大学中国語学中国文学教室紀要 11: 1-25 金沢大学人文学類中国語学中国文学研究室
 岩田礼（2009）『漢語方言解釈地図』（白帝社）
 小田格（2015）「中華人民共和国福建省南部における閩南語テレビ放送について」『言語政策』12: 27-52. 日本言語政策学会
 グロータース, W. A.（1976）『日本の方言地理学のために』平凡社
 グロータース, W. A.（1994）『中国の方言地理学のために』好文出版

- 日高知恵実 (2013) 「漢語北方方言における方言境界線と方言区画—等語線重ね合わせ法の実践—」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』 12: 31-55 金沢大学人文学類中国語学中国文学研究室
- 福建省地方志编纂委员会 (2006) 「福建省情資料庫 方言志」
<http://www.fjsq.gov.cn/ShowText.asp?ToBook=196&index=8&>
- 宮本大輔 (2009) 「中国人の言語評価」社会言語科学 11-2 : 55-68
- 李仲民 (2014) 『地理語言学的実践』 台中：一切智智國際文創有限公司
- Bloomfield, L. (1933) *Language* (London) (三宅鴻他訳 (1962) 『言語』 大修館)
- Chambers, J. K., and P. Trudgill (1980) *Dialectology* Cambridge University Press
- Cheng, Chin-Chuan (1988). 漢語方言親疏關係的計量研究 [Computational research on the affinity between Chinese dialects]. 中國語文 [Chinese Languages] 203, 87-102.
- Gooskens, C. & W. Heeringa (2012) "The position of Frisian in the Germanic language area" researchgate.net
<https://www.researchgate.net/publication/237534065>
- Inoue, Fumio (1999) "Classification of dialects by image --English and Japanese", in Preston (1999.) pp.147-159.
- Inoue Fumio (2011) First Dialectologists Willem A. Grootaers. *Dialectologia* 7: 157-164.
https://www.publicacions.ub.edu/revistes/ejecuta_descarga.asp?codigo=713.
- Inoue, Fumio (2015) "The economic status of Chinese and Japanese: an international survey, internet searches and linguistic landscape" 中国語言戰略 2-1: 10-22 & appendix
- Niedzielski, N.A. & D.R. Preston (2000) *Folk linguistics* (de Guyter)
- Preston, Dennis R. (1989) *Perceptual Dialectology — Nonlinguists' Views of Areal Linguistics* (Foris)
- Preston, Dennis R. (ed.) (1999) *Handbook of Perceptual Dialectology* Vol.1 (John Benjamins)
- Preston, Dennis R. & Daniel Long (2002) *Handbook of Perceptual Dialectology* Vol. 2 (John Benjamins)
- Smakman, Dick (2006) *Standard Dutch in the Netherlands* (LOT)
- Tang Chaoju (2009) *Mutual Intelligibility of Chinese Dialects: An Experimental Approach* (LOT)
- Tang, C. & van Heuven, V.J., (2007) 'Mutual intelligibility and similarity of Chinese dialects'. In: Los, B., van Koppen, M. (Eds.), *Linguistics in the Netherlands* 2007. John

Benjamins, Amsterdam, pp. 223-234.

Tang, C. & Heuven, V. J. J. P. van. (2015) Mutual intelligibility of Chinese dialects: predicting cross-dialect word intelligibility from lexical and phonological similarity. In *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences. 2015*. CD-digital [ICPhS XVIII]: ICPHS0377(pdf)Glasgow, UK.

謝辞

この調査に際して大勢の方々のお世話になった。福建師範大学福清分校李斗石先生は学生・教員のグループインタビューと調査旅行を世話して下さった。王慧傑先生と胡秋香先生は、調査旅行の面接の通訳を引き受けてくださった。黄琪敏先生は、第3次調査のアンケートを実施して下さった。福建師範大学福清分校日本語学科3、4年生にはアンケート調査にご協力いただいた。各地の成人には、お忙しいところ面接に応じていただいた。愛媛大学秋谷裕幸教授には、多くの大著を頂戴し、調査の準備から論文執筆まで、適切なコメントをいただいた。深く感謝申し上げます。

福州方言意識調査票 説明

2016/05/26

自分がことばや方言について持っている意識について教えてください。
福建省について記入してください。この紙には日本の例を示します。
普通話しか話さない人は、自分の父親のつもりで書いてください。

1 自分が生まれ育った場所に **X** を書いてください。

2 ことばの違いについて、線で囲んで示してください。

a. 同一 自分のことばと同じ範囲



b. 類似 自分のことばと似ている範囲



c. 相異 自分のことばと違う範囲



d. 理解不能 全く理解できない範囲

点線の外

3 ことばの感じ・イメージについて、
線を引いて示してください。

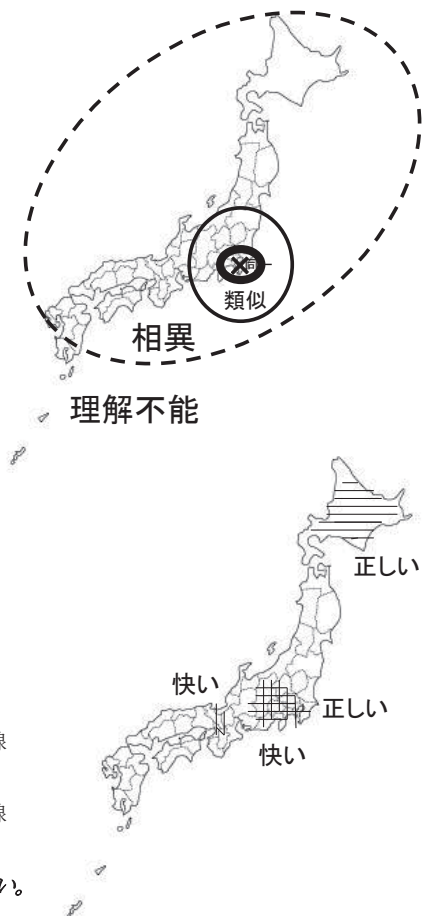
a. 正しい correct ことばを使う範囲

横線

b. 快い comfortable ことばを使う範囲

縦線

ありがとうございました。別紙地図のみ提出してください。



Continuum of Fujian language boundary perception —Dialect division and dialect image—

INOUE Fumio

Keywords: Fujian, Southern Bin, Dialect division, Dialect image, Linguistic boundary

Abstract

It is argued that the dialects of South China are as different from each other as the European languages are. This paper reports on a perceptual dialectological investigation of consciousness of linguistic difference in Fujian Province, where dialectical difference is said to be intense. The dialect image technique was applied, so informants were asked to partition a map with lines. The geographical areas as partitioned according to "same as my variety," "similar to my variety," and "cannot understand at all" were analyzed. Since varieties in "cannot be understood at all" exist side by side in Fujian-province, there are several dialects which have the status of independent language in linguistic difference perception. Fujian and the Hakka language are conceived of as separate languages. Fujian (or Bin) is further divided into several lower rank languages, including Southern Bin, Eastern Bin, Northern Bin, etc. Although mutual intelligibility is difficult for any two geographic extremes, there is a chain of mutual intelligibility between neighboring locations. There is also consciousness that they are part of the Chinese language (Mandarin, Putonghua being the standard). Certain cities such as Fuchou and Amoy (Xiamen) are associated with the image of "correct". Their respective varieties are considered socially high and mutual intelligibility between them is low. They occupy the social status of independent language.

(東京外国語大学 名誉教授)